

或る下町の変遷

児玉 寛嗣

猛暑が続くなかプロ野球はセリーグでは例年はない激しいデッドヒートが繰り広げられている。そんななか、プロ野球の本拠地球場が家の近くにかつてあったことを偶然、知った。

自宅から明治通りを浅草方面に向かって十五分ほど歩くと、千住間道の入口に来る。南千住駅に通じるこの脇道を進んでいくと、体育館、プールや野球場などを備えた荒川総合スポーツセンターという区民施設が左手に見えてくる。荒川区出身の北島康介が北京五輪で二つの金メダルを獲得した時、この施設を北島康介記念スポーツセンターと改称しようという動きがあったように記憶している。かつて、ここにはパリーグ・大毎の本拠地、東京スタジアムが五十年ほど前まであった。

当時のプロ野球では、巨人、国鉄（現・ヤクルト）、大毎（現・ロッテ）の三球団が後楽園球場を本拠地としており、過密スケジュールが常態化していた。そこで大毎のオーナーで大映の社長でもあった永田雅一は巨額の資金を投じて、土地を取得、野球場を作り、大毎の本拠地にした。映画産業が斜陽化する前のことだった。常磐線・南千住駅から近く「下町の庶民の球場」として永田オーナーは自慢していた。しかし、観客席は閑古鳥が鳴く状態で、経営難に陥って、わずか十年たらずで、閉鎖の憂き目にあった。その後、球団はロッテに身売りしたが、ロッテは本拠地を求めて各地を転々とした。

球場用地として買収される前は毛織物工場の跡地だった。戦前は官営工場で軍隊に外套などの毛織物製品を供給していた。明治初期にドイツに留学、毛織物技術の導入に貢献した官営工場の初代所長、井上省三の銅像が残っている。戦後、工場は民間企業に売却。しかし、毛織物産業の斜陽化で工場は昭和三十年代には閉鎖された。

この場所の変遷に日本の近代史の一面を垣間見た気がする。現在は区民のリクリエーションの場として賑わいを見せているようだが、高齢化が進むこの先、また新たな景色が見えてくるのかもしれない。